

扇に書く和歌

—『源氏物語』におけるその会話的機能をめぐって—

朴 英 美*

1. はじめに

『源氏物語』では登場人物たちが和歌を書く際、その紙までも繊細に描かれる。どのような紙を用いるかは、和歌を書く人物の心情を理解するために重要であろう。これを前提として、本稿では、さらに、紙ではなく、扇を選んで、和歌を書いた作中人物の意図を中心に考察する。

扇に詩歌を書く意味を明確にするため、平安時代の他作品の例も視野に入れる。また、韓国の扇との比較も行いたい。

『源氏物語』には平安初期に開発された日本固有の開閉式の二種の扇「檜扇」と「かはほり」が見られ、扇に歌を書く場面が6例ある。『源氏物語』の女君たちは扇を用いることで自分から和歌が詠むことができた。扇を用いることで歌の内容とは異なる心情を表すことができる。これが本稿の主な主張である。

2. 平安時代の諸作品における扇に書く詩歌

『源氏物語』における「扇」に書かれた和歌を考察する前に、平安時代の他の作品について瞥見する。『王朝語辞典』の「扇」の項に「扇は単なる銷夏の用を越え、装いの一部として己れの趣味好尚を競うものであった。またそこに描かれた絵や添えられた詩歌により、口には出さぬ何かを表現することもある」^(注1)とある。この指摘は、扇

に歌を書くことの意味を考える上で重要となる。

『大鏡』伊尹伝には、藤原行成が一条天皇に献上した扇について詳しく語られている（伊尹伝、一九〇頁）。その扇は骨に漆を塗ったもので、表には漢詩が楷書で、裏には草書で書かれている。その書きぶりも繊細であり、天皇はこれを大切にす。この例から、扇は両面でそれぞれ異なる書風の書を楽しめる芸術品であると言える。

『うつほ物語』には、扇に書く和歌が3例があるが、扇の具体的な描写はない。

『枕草子』では扇の種類や骨などについて具体的な記述が見られ、人々が服飾の一部を成す貴重品として扇を扱っていたことが読み取れる。また、中宮定子の言葉「男どもみな扇に書きつけてなむも持たる」^{そのこ}（七八段 頭中将のすずろなるそら言を聞きて・一四〇頁）から、当時の殿上人たちは自身の扇に気に入った歌を書き付けていたことが分かる。さらに、中宮定子が日向へ下る乳母に与える扇に、自ら歌を書いた例がある（二二四段 御乳母の大輔の命婦、日向へくだるに・三五九頁）。その扇には日がのどかにさす田舎の館と雨の降る京という異なる雰囲気のある二つの絵が描かれていた。そして、雨の降る方に定子が自身の歌を書くことで、乳母の方は「日がのどかにさす田舎の館」になる。この扇には相反する要素があることに注意したい。

『紫式部日記』でも服飾の一部として扇の風情を大切に思う場面がみられる。ここでは、自身の扇と他人の扇を心の中で比較する女性たちの様子が描かれる。

*お茶の水女子大学大学院院生

あふぎ
扇など、みめには、おどろおどろしくかかや
かさで、よしなからぬさまにしたり。心ばへ
ある本文うち書きなどして、いひあはせたる
ほんもん
やうなるも、心々と思ひしかども、よはひの
ほど同じまちは、をかしと見かはしたり。
人の心の思ひおくれぬけしきぞ、あらはに見
えける。 (一四〇～一四一)

扇は派手なものではなく、風情のあるものを選
び、その扇に趣のある詩文を書き入れる。「本文」
は古典に典拠のある詩文である。萩谷朴氏がいう
ように「この場合は、皇子御誕生を慶祝する意の
ある詩句であるから、『和漢朗詠集』巻下の「嘉
辰令月歎無極、万歳千秋楽未央」とか（略）「万
代と御蓋の山ぞよばふなる天の下こそたのしかる
らし」のような詩歌」(注2)であろう。このあたりの
文章が凝縮していてやや解しにくいのが、諸注が
解くように、同じような年齢・階層の女房同士は、
各自趣向を凝らそうと思っていても、同じような
「本文」を扇に記してしまい、苦笑いして見合う
のだと解せる。

『紫式部日記』の記事から、扇と書かれた歌が、
他人とは異なる特殊な趣向を表すことは難しいこ
とであったといえよう。『大鏡』の楷書と草書、『枕
草子』の雨降る京と日のどかな田舎という異なる
要素を持つ扇の存在が注目される。扇に歌を書く
ことは、手紙の場合よりも、個性的な趣向を作り
出さなければ、評価されないと考えられる。この
ような考察を踏まえ、『源氏物語』でも和歌を扇
に書く例を考察したい。

3. 『源氏物語』における扇に歌を書くこと

『源氏物語』には言葉の用例数で「扇」が36例、
「かはほり」が2例見られる。同じ扇を指して重
複する場合を除けば「扇」34例、「かはほり」2
例である。『源氏物語』の扇を機能別に分類すると、
最も多い例は顔を隠すために用いられた9例であ
る。次に、最も基本的な使い方である風を起こす

ために用いられた例が5例見られる。三番目は人
を呼ぶ合図として用いられた4例である。その他、
数は少ないが髪^{あふぎ}の比喩的形容や拍子、交換、花を
のせる、饞別や祝いの贈り物、月を招く、持ち主、
所持品、故事を連想させるなどに用いられる。扇
はその香りまでも大切に思われる貴重品でもあり、
その持ち主の品格を表す物でもあった。物語の登
場人物たちは、そのような扇になぜ歌を書いたの
だろうか。

以下に、扇に書かれた和歌を含む場面を考察す
る。

A 修法など、またまたはじむべきことなどおき
ずほふ
てのたまはせて、出でたまふとて、惟光に
これみつ
紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もて
しそく
馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、
な うつ か
をかしようすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへた
る夕顔の花

そこはかたなく書きまぎらはしたるもあては
かにかゆゑづきたれば、いと思ひのほかにか
しようおぼえたまふ。

(夕顔①一三九～一四〇)

Aの前に「白き扇^{あふぎ}のいたうこがしたるを、(童)
「これに置いてまゐらせよ、枝も情なげなめる花
なさせ
を」とて取らせられたれば」(夕顔①一三七)とある。
源氏が、夕顔の花を置くようにと差し出された
「白き扇」を見る場面である。扇は香りが深く染
みており「あて推量にあのお方かと存じます。白
露の光をそえて、夕顔の花は一段と美しくなりま
す」との歌がおぼめかすような、しかし、気品が
あって奥ゆかしい筆跡で書かれていた。源氏は意
外に思い、興味深く感じる。この後、源氏は送り
主の身分は高くないと思いつつも、自分をそれ
と目ざして歌を送ったことを心憎く思い、会いた
く思う意の歌を送る。

Aの夕顔の扇について、白い扇ということから
班女(班婕妤)の故事の引用として男女の関係が
長続きしない不吉さを指摘する論が多い(注3)。そ

の場合、東屋巻でみられる浮舟の「白い扇」を見て、薫が班女のお話を思い出さず「さるは、扇の色も心おきつべき闇のいにしへをば（略）事こそあれ、あやしくも言ひつるかな」（東屋⑥一〇一）に関連づけて論じられる。しかし、本稿では、扇の「白」色についてまた別の視点から論じたい。

班婕妤「怨歌行」（『文選』など）の初二句に「新裂齊紈素、皎潔如霜雪」とある。「皎潔」は白く清らかで汚れないさまをいう。また、『源氏物語』には白い紙を用い、手紙を書く例がある。具体的には「白き紙」2例、「白き薄様」2例、「白き色紙」6例、「白き唐の紙」1例である。これらは主に誠実な心情や純粋な恋心を訴える手紙を書く際に用いられた。また、紙ではないが、匂宮が浮舟の白い桂姿を見て、色々な色を重ねるよりもかえって新鮮で優雅であると思う例「なつかしきほどなる白きかざりを五つばかり、袖口、裾のほどまでなまめかしく、色々にあまた重ねたらんよりもをかしよう着なしたり」（浮舟⑥一五二）がある。この例は『源氏物語』の中で、白い色が持つ清楚さが分かりやすく示された部分である。

夕顔巻に横溢する白い色のイメージについて、原岡文子氏は「『白』が忌みと清めとの思想を裏腹に背負った聖なる色としての側面を持つ」と指摘する^(注4)。

Aの夕顔は、扇と和歌、そして美しい筆跡から、身分が高くななくても、高い品性を持つ人物であることが強調されている。夕顔の和歌は源氏の正体を知っていることを示唆するとともに男を誘うような大胆さも見せ、白い扇が持つ清純な印象との落差が生まれている。この場合、扇は「軽い気持ちの女性ではありません」という意味として用いられた。扇の白い色が夕顔の品性を守るからこそ、夕顔は大胆な和歌が詠めたのである。

Bかはほりのえならずゑがきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、^{まかは}目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。似つかはしからぬ扇のさまか

など見たまひて、わが持たまへるにさしかへて見たまへば、赤き紙の映るばかり色深きに、木高き森のかたを塗りかへしたり。片つ方に、手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず「森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを、^{こと}言しもあれうたての心ばへや、と笑まれながら、（源氏）「森こそ夏の、と見ゆる」とて、何くれとのたまふも、似げなく、人や見つけんと思ひを、女はさも思ひたらず。

（紅葉賀①三三七）

Bの源典侍のかわほりは、濃い赤い紙に、森の絵が金泥で描いてある。その端に古風ながら風情のある筆跡で「森の下草老いぬれば」と書いてある。諸注が指摘するように『古今和歌集』の「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（『古今集』雑上 読人不知）である。この歌が男ひでりを詠む歌か「老い」を嘆く歌かをめぐって解釈が分かれるが、ここでは嘆老の歌と考える。Bの派手な扇と老いを嘆く歌は、一見すると不似合いであり、源氏も扇と歌の趣向に矛盾を感じる。さらに、扇の歌が源氏への呼びかけになることも注意したい。源典侍は特に源氏を意識して「大荒木の」の和歌を扇に記したのではないはずであるが、しかし、手に持つ扇に記してあったことで、この古歌は源氏への働きかけを強めることになった。源典侍は派手な扇を「老いているけれど、まだ女性としての魅力はあります」という意味を表すために用いたと考えられる。

Cかのしるしの扇は、桜の三重がさねにて、濃きかたに霞める月を描きて水にうつしたる心ばへ、目慣れたれど、ゆるなつかしうもてならしたり。「草の原をば」と言ひしさまのみ心にかかりたまへば、

（源氏）世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて

と書きつけたまひて、置きたまへり。

（花宴①三六〇）

源氏の扇と交換した朧月夜の扇は桜色の檜扇で、

濃い色を塗ったほうには霞む月が水に映る様子が描かれている。源氏は朧月夜の様子が心に残り、「今まで経験したことのない恋」という歌を、その扇に書き付ける。

『王朝文学文化歴史大辞典』「コラム7」では、「扇の交換は男女の契りや再会を念じるものとなっている。この場合に当たるのが、源典侍や朧月夜の君の扇である」と指摘する^(注5)。

この扇について坪井暢子氏は「扇の交換は、顔を見られても良い、深い仲になっても良い、あるいはすでに深い仲になった人で行うことであり、受け取った人には、扇から、自分がどういう人物なのかを想像させる、そういう意味をもつ」^(注6)と、扇はその持ち主を想像させる意味があると指摘する。河添房江氏は「朧月夜の「桜がさねの扇」も、光源氏も「唐の綺」の桜襲の直衣も、抜き差しならない禁忌の恋を背負って流離へと向かう運命の予徴であったといえよう」^(注7)と、源氏の服飾と朧月夜の扇を禁忌の恋の印の視点から論じる。そして、本橋裕美氏は「光源氏は「あふぎ」と女君に引き寄せられているといえる。物語の「扇」は、特に男女間でこうした引力を発揮するのである」^(注8)と、恋の始まりとしての扇の力を指摘する。また、朧月夜の扇の「桜の三重がさね」が「桜色の扇」か「三重がさね」かの問題を追究する論も見られる^(注9)。

従来の指摘通り、朧月夜の扇が恋や二人の再会を表すという視点も重要であろう。しかし、ここで注目したいのは源氏がなぜ歌を紙ではなく朧月夜の扇に書いたかという点である。朧月夜の扇は由緒あるものだが、「目慣れたれど」と、よくあるものと記される。源氏は扇に「経験したことのない恋」という歌を書き、扇自体の風情と歌との落差を作り出した。

D今日も所もなく立ちにけり。馬場殿のほどに立てわづらひて、(源氏)「上達部の車ども多くて、もの騒がしげなるわたりかな」とやすらひたまふに、よろしき女車のいたう乗り

こぼれたるより、^{あふぎ}扇をさし出でて人を招き寄せて、「ここにやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」と聞こえたり。いかなるすき者ならむと思されて、所もげによきわたりなれば、ひき寄せさせたまひて、ひき寄せさせたまひて、(源氏)「いかで得たまへる所ぞとねたさになん」とのたまへば、よしある扇の端を折りて、

(女)「はかなしや人のかぎせるあふひゆゑ
神のゆるしの今日を待ちける
注連の内には」とある手を思し出づれば、か
の典侍なりけり。あさましう、古りがたく
もいまめくかな、と憎さに、はしたなう、

(源氏)かざしける心ぞあだに思ほゆる
八十氏人になべてあふひを
女はつらしと思ひきこえけり。

(典侍)くやしきもかざしけるかな名のみ
して人だのめなる草葉ばかりを
と聞こゆ。人とあひ乗りて簾をだに上げたま
はぬを、心やましよう思ふ人多かり。

(葵②二八～三〇)

賀茂祭で車の立て場に困る源氏一行に、見物に良い場所を譲るといふ申し出がある。源氏の返事に対して、源典侍は自身の扇の一部を折り、「源氏に会う今日を待っていたのに、他の人のものになってしまった」といふ歌を送る。源氏はその筆跡を見て、扇の持ち主が源典侍と知る。源氏は源典侍の年寄りらしくない派手な心情が憎く、そっけなく「今日は誰彼も会える日です」と返事をす。源典侍は薄情と思い、「名だけの会う日だったのに、葵をかざしたのが悔しい」と返した。

Dの源典侍の扇は具体的な描写はないものの、由緒あるものとある。BとDには源氏と扇を用いてやりとりが始まるという共通点がある。源氏は不愉快に思うも、源典侍に返事を送った。このことから、源典侍が歌を扇に書いたことは、紙に書くよりも源氏への訴求力を強める効果があったと見るべきであろう。この場合、源典侍の「よしあ

る扇」は、「女性としての魅力」を表す物として用いたと考えられる。

E北の御障子もとり放ちて御簾かけたり。そなたに人々は入れたまふ。しづめて、宮にも、ものの心知りたまふべき下形を聞こえ知らせたまふ、いとあはれに見ゆ。御座を譲りたまへる仏の御しつらひ見やりたまふも、さまさまに、(源氏)「かかる方の御営みをも、もろともにいそがんものとは思ひよらざりしことなり。よし、後の世にだに、かの花の中の宿に隔てなくとを思ほせ」とて、うち泣きたまひぬ。

(源氏)はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しきと御硯にさし濡らして、香染なる御扇に書きつけたまへり。宮、

(女三の宮)へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむと書きたまへれば、(源氏)「言ふかひなくも思ほし朽すかな」と、うち笑ひながら、なほあはれとものを思ほしたる御気色なり。

(鈴虫④三七六～三七七)

Eは尼になった女三の宮の持仏開眼供養の場面である。源氏が和歌を書き付けた「香染めなる扇」は「丁子を濃く煎じ、その汁で染めたもの。薄紅で黄色を帯びる。丁子染めとも。尼にふさわしい色合い。女三の宮の所持する扇」(『新全集』)である。源氏は女三の宮とともに仏事を催すとは考えもしなかったと言い、「来世には同じ蓮の花の中に生まれようと約束していたのに、蓮の葉の上を転がる露が別れ別れになるように少しの間別れることになる今日が悲しい」という歌を女三の宮の扇に書いた。それを見た女三の宮は、「来世は同じ蓮と約束しても、あなたのお気持は、私と一緒に住もうとはお思いではございますまい」と書いた。源氏は「せっかく申し出た甲斐がないですね」と苦笑しつつも、しんみりと感に堪えている。

Eの和歌の贈答に場面について、従来、気持ち

の整理ができない源氏に対し、女三の宮には出家によって成長した様子が見られると指摘されてきた(注10)。

杉浦一彰氏が「出家者の目指す極楽世界という連想で「香染なる御扇」と和歌は結ばれている」(注11)と指摘するように、出家者らしい扇に触発されての源氏の和歌の言葉である。E以前では、柏木巻の薫五十日の場面でも横笛巻の朱雀院からの贈り物の場面でも、源氏が女三の宮を責め、宮は黙り込むほかなかったが、ここでは宮は返歌をしている。宮の歌が「夫婦の関係について女のほうからその解消を呼びかける歌」(『新大系』)であるにしても、口頭や紙によるよりも、扇であることが返歌をしやすい場を女三の宮に提供したと言える。自分の扇に、執着を示す源氏の和歌が書き込まれたことが、宮の反発の返歌を誘発したと解せようか。換言すれば、香染の扇と源氏の執着の言葉との落差が、宮の返歌をもたらしたと言えそうである。

F風の音さへただならずなりゆくころしも、御法事の営みにて、朔日ごろは紛らはしげなり。今まで経にける月日よと思すにも、あきれて明かし暮らしたまふ。御正日には、上下の人々みな齋して、かの曼荼羅など今日ぞ供養せさせたまふ。例の宵の御行ひに、御手水まるらする中將の君の扇に、

(中將の君)君恋ふる涙は際もなきものを今日をば何の果てといふらん

と書きつけたるを取りて見たまひて、

(源氏)人恋ふるわが身も末になりゆけど残り多かる涙なりけり

と、書き添へたまふ。(玄④五四三～五四四)

Fでは、紫の上の一周忌に、清めの水を源氏に使わせる中將の君の扇が描かれる。中將の君の扇には「亡き紫の上を恋慕う涙はいつまでも流れているのに、今日はなんの果ての日というでしょうか」と、紫の上を懐かしむ歌が書かれていた。その扇を見た源氏は、「亡き人を恋慕う私の命

も、残り少なくなっていくますが、涙は残り多い」という歌を中将の君の扇に書き添える。

坪井暢子氏は女性が自身の顔を隠すために用いる扇を、男性の源氏に取られたことに注目し、Fの場面を論じる^(注12)。また、山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈』は「源氏が率先して紫の上の一周忌を営んだ形跡はなく、むしろ中将の君との贈答の中で、密やかに悼む源氏の姿が描かれている。(略)扇に書かれた中将の君の独詠歌に源氏が応酬したのが「人恋ふる」の歌。「我が身も末なりゆけど」は、源氏が人生の終焉に近づいていることへの感慨」と指摘する^(注13)。しかし、本稿では、Fの場面をまた別の視点から論じたい。

中将の君は物語の重要人物ではないが、熟練した女房である。中将の君は源氏の悲しみにさりげなく共感を表す歌を書き、源氏の目に入るようにしたと思われる。Fでもまた、扇に書かれた歌によって、女性からの贈歌になっていることに注目したい。

中将の君の歌は、亡き紫の上を慕う中将の君の自身の思いを詠んだものであろう。それに対して源氏は、自身の命に関する表現をなぜ歌に入れて詠んだのだろうか。

中将の君の扇は「一周忌の曼陀羅供養が終わった後、紫の上をお忘れではないでしょうか」という意味だと考えられる。源氏の、自身の命は残り少ないという上の句はこれに応じたものと思われる。中将の君の扇は亡き紫の上への源氏の心を確かめるために用いられた。

二人のあいだには亡き紫の上を恋い慕う思いを確かめる会話の呼吸が読み取れる。扇は中将の君にとって、身分差を越え、源氏に先に呼びかけることを可能にする手段であった。

4. 中国・韓国の扇 —韓国を中心に—

中国の場合、諸葛孔明(181~234)が軍を指揮する時に「白羽扇」を持つ例や、『西遊記』で

孫悟空が借りた「芭蕉扇^{ばしゅうせん}」を49回扇ぎ、火を消す場面が有名である。

韓国では、新羅、百濟、高句麗の三国時代から扇の記述はみられるが、文学に用いられたのは、高麗時代の禅僧たちのやり取りである。弟子の慧謙^{ヘシム}(1178~1234)は、師の知訥^{チヌル}(1158~1210)に会い、掲頌^{ケソソ}(漢詩)を詠む。その掲頌を聞いた知訥は手元の扇を慧謙に渡す。慧謙は扇を媒介にし、悟りの境地を喩える掲頌を詠む。

中期に林梯^{イムジヒ}(1549~1587)が黄眞伊^{ファンジニ}(生没年未詳)の墓の前で開閉式扇に詩調(朝鮮時代の固有の詩)を書いた。黄眞伊^{ファンジニ}の死を悲しむ歌であるが、彼女の墓の前で書かれたことから、その悲しみをいつまでも記憶にとどめたい意味もうかがえる。韓国では開閉式の扇は檜扇とかわほりの中間の形が考案され、美術・舞踊・民族の遊びなどに幅広く使われた。

韓国でも、李氏朝鮮時代の小説の中にも、女が、中国の班女のように秋になって捨てられる扇に自身を喩えて漢詩を詠む例がみられる。『源氏物語』の注釈書でも、扇が登場する場面に、班女の話との関連する指摘が見られる。しかし班女の話はその概念や知識が中国から韓国と日本に伝わったものである。東屋巻のように、薫が浮舟の白い扇を見て、故事を直接連想する場合を除けば、扇がいつも不吉とする指摘には違和感がある。

5. 結論

『源氏物語』における、和歌を扇に書く場面の意味について考察した。平安時代の他作品と比較すると、『源氏物語』の扇に書かれた和歌は、会話の成り立ちがたい男女を結びつける媒体としての特徴があると言える。『源氏物語』では特に女君たちが扇に書いた歌は何らかの呼びかけや贈歌になっていた。扇自体の風情と歌の意味とは必ずしも一致せず、そのことがむしろ対話を促す面があると読める。平安時代の文学における扇の描写

から、日本では、固有の形が考案された早い時期から扇が芸術的なものへと発展を遂げており、それが文学の表現手段のひとつとしても導入されたものと考えられる。

〔注〕

- (注1) 秋山虔編『王朝語辞典』(東京大学出版会、2000年)。
(注2) 『紫式部日記全注釈 上』(角川書店、1971年) p.265
(注3) 小林正明「白い扇の女たち」『研究ノート』、余田充「「扇で月を招くこと」と「白き扇」—『源氏物語』橋姫巻と東屋巻—」『四国女子大学紀要』11(2)、(1992年)。秋本守英「班女の扇と源語の扇」(研究余滴)『むらさき』第三八輯(2000年)
(注4) 原岡文子「遊女・巫女・夕顔—夕顔の巻をめぐって—」『源氏物語の人物と表現』(翰林書房、2003年、初出1989年) p.114
(注5) 小町谷照彦・倉田実編『王朝文学文化歴史大辞典』(笠間書院、2011年) p.302
(注6) 坪井暢子「扇に書く—『源氏物語』の消息文に関して—」『平安文学新論—国際化時代の視点から—』(風間書房、2010年) p.176
(注7) 河添房江「花宴巻の朧月夜と光源氏—桜襲と唐の綺」『源氏物語時空論』(東京大学出版会、2005年、初出2004年) p.125
(注8) 本橋裕美「平安の櫛と扇をめぐって—物語における機能と変遷を中心に—」河添房江編『王朝文学と服飾・容飾』(竹林舎、2010年) p.147
(注9) 畠山大二郎「有職からみた『源氏物語』の扇—朧月夜の扇をめぐって—」『國學院大學大学院平安文学研究(1)』(2009年)。伊藤慎吾「源氏物語の扇の考—特に五重の扇を中心に—」『武庫川国文』第十号(1976年)。
(注10) 榎原茂子「女三宮の変貌—光源氏の子女教育—」『平安文学研究生成』(笠間書院、2005年) など
(注11) 杉浦一彰「『源氏物語』「鈴虫」巻における女三宮考—〈香染の扇〉の行方から—」『愛知淑徳大学国語国文』第三二号(愛知淑徳大学国文学会、2009年) p.83
(注12) 坪井暢子氏注(6) 前掲論文、前掲書p.177
(注13) 山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈 八』(風間書房、2010年) p.561

* 諸文献の本文引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。